

製本のススメ

Vol. 58

街路樹もそろそろ冬支度に入りました。吐く息も時折 白くなるほどですね。夕方「石焼きい～芋お～」という哀愁たっぷりの声を聞くと、妙に心惹かれるのは、寒くなってきた証でしょうか。

今回は**製本の昔話し**

たまには息抜きに昔話でもいたしましょう。井関製本が誕生するもっと前、明治時代に遡ります。当時は出版社などなくて、**和本屋が出版から販売まで自社製作**の時代。もっとも、和本というのは後記に現れる洋本との区別の為に呼んだ名で、江戸の頃からは「板本(イバ)」と呼ばれています。製本職人は板の間に「あぐら」をかいて**自分専用の箱盤(ハコバ)**：仕事台と道具入れが一緒になったものを前へ置きそこで作業をしました。膝頭をピタッと床につけて座ると、一番安定が良く能率が上がる座り方で「**あぐら3年**」とさえ言われていました。座り方を見れば腕前がわかるって事です。

当時は入社とは言わず【奉公】といわれ、子供の時から住み込みで世話になり、その仕事を覚えていたのです。むろん、仕事は盗んで覚えろ！と言われた時代です。

製本職人には特有の風俗があり、着物に角帯 タスキ掛けで、頭には頭巾をかぶり職人同士は通り名で呼び合い、オシャカ！とかウラナリ！と言う様に、**あだ名が付けば一人前**でした。小僧は角帯に前垂れ掛け・オカッパ頭が定番のスタイルです。

当時の和本屋では版木が財産で(著作権的意味)版木彫りだけは**外注(彫り師)**に出しますが、後は社内加工です。原稿が**板下(ハツタ)**職人の手によって板下となり、それを**彫り師**が彫って版木(ハギ)になり**摺り師**によって色が重ねられて摺り上げ丁合いです。ちなみに丁合いとは「丁」が紙の単位だった事から、摺られた紙を順番に整えていく作業が丁合いと呼ばれました。

さて、丁合いをしたら天地を化粧断裁して寸法を整え、**製本職人がコヨリ**で中締め(本文だけを仮綴りする事)をして表紙をつけ、最後に糸で表紙と本文とを綴じ題箋(ダヘツ)を貼って店頭並べる。和本は、この糸の運び方(綴じ方)でイメージが変わり、デザイン性にも優れ強度も有り、また糸が切れても修理が容易でその度に表紙のデザインを変える等**カスタマイズ・リメイクが自在**です。もちろん全てが手作りで、恐ろしく精巧な手ワザがもたらした印刷製本技術です。

今の日本橋が、まだ黒塗りの小さな木橋であり、三越が三井呉服店と呼ばれていた頃印刷界にはドイツからグーデンベルグ方式の活版印刷がやってきて、時代は手作りから量産へと流れていきます。製本も和本から洋本へ移り変わって行ったのです。

井関製本では、伝統の製本技術と心意気を引き継ぎ、現代にマッチした製品作りを心がけています。

by (株) 井関製本